

彦根高等商業学校の英語科教科書

高等商業学校は、外国との貿易を担う商業人の育成を視野にいれており、外国語教育にも力をいれていたと言われていました。ここでは、滋賀大学経済学部の前身である彦根高等商業学校の英語科目において使用された教科書を展示し、高等商業学校における外国語教育の一端を紹介します。なお今回、展示した教科書は、卒業生から寄贈されたものです。

1. Harold E. Palmer, *English through Questions and Answers, Book II, Part II*, 開拓社、1927年。[1930（昭和5）年度 第二学年 「会話」 担当：ルイス・エム・ローリー備外国人教師]（展示資料：1939年発行第12版）

日本の英語教育に直接教授法、あるいは、オーラル・メソッドを普及させた人物として知られる、ハロルド・E・パーマーが作成した教科書です。パーマーはもともと、ベルギーにおいて英語学校を運営していた人物で、日本と縁を結んだ当時はユニバーシティ・コレッジ（ロンドン大学を構成する大学のひとつ）の音声学科で音声学、言語学、心理学などに基づく外国語教授法を研究・教育していました。その彼を、成城学園の創立者である澤柳政太郎が懇請し、川崎造船所（現在の川崎重工業の前身）の社長であった松方幸次郎（「松方コレクション」で知られる西洋美術蒐集家でもあった）がスポンサーになることによって、文部省の英語教授顧問として1922（大正11）年に招聘しました。彼はその後、1936（昭和11）年までの14年間にわたって滞在し、日本に適した英語教授法の研究し、その普及に尽力しました。ここに展示した教科書は、全4巻のうちの第2巻第2分冊です。各課は、数頁程度の小文とその内容についての英問によって構成されています。現在のシラバスに相当する『教授要目』には“Discussions and talks by students”と書かれており、英問英答のみならず学生間で話させ議論させる、という形式で授業は展開されたと思われます。また、この教科書の第一分冊を第一学年で、第二分冊を第二学年で扱い、第三学年では同書のBook IIIの第一分冊を使うと『教授要目』には書かれています。

2. Aldous L. Huxley, *Half-Holiday*, 大倉広文堂、1934年。[1934(昭和9)年度 第二学年 「訳読」 担当：本田玄雄教授]

イギリスの作家オルダス・L・ハクスリーが1926年に発表した短編集 *Two or Three Graces* 所収の一編がタイトルとして採られ、彼の小品が編集される形で構成された、旧制の高等学校や専門学校(現在の大学に相当)の訳読用教科書です。寺井邦男と西川融とが注釈をつけています。『教授要目』には「現代の英語に習熟せしめ現代の文学及思想を理解せしめるため」、と記されています。英語のみならず、同時代のイギリスの文学やその背景にある思想に知ることが目指されていたと考えられます。担当教官である本田玄雄は文学士で公立の旧制中学校校長から彦根高等商業学校教授に就任した人物でした。

3. John Galsworthy, *The Country House*, 開隆堂、1941年。[1941(昭和16)年度 第三学年 「訳読」 担当：高橋源次教授]

イギリスの作家ジョン・ゴールズワージーが1907年に発表した全3部31章の小説を、担当教官の高橋自身が全3部16章に縮約し注釈をつけた訳読用の教科書です。『教授要目』には「十九世紀から二十世紀に亘る中産上流階級の田園生活を中心に展開する母性愛の長編記録」であり、「全編平易なる詞藻(筆者註：「修辞」「レトリック」のこと)の中に豊かな牧歌的詩情と家庭的雰囲気を生かしている」、と記されています。これも英文学を教材としていますが、作品を読むことによってイギリス人の生活や心性を理解する一助になったと考えられます。担当教官の高橋源次はイギリス留学経験(ロンドン大学)を持ち、ゴールズワージー研究で文学博士号を取得しています。

[参考文献]

伊村 元道 『パーマーと日本の英語教育』 大修館書店、1997年。

(坂野 鉄也)

[付記]

この展示は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「20世紀前期の帝国日本における実学実践と教養主義をめぐる文化研究」(課題番号:24520746)による研究成果の一部です。